

2103 離島覚書（長崎県・奈留島）



久賀島の折紙展望台から奈留島を望む

令和3年6月22日

フェリー太古

宇久島、小値賀島^{おぢかじま}を含む広義の五島列島にはすでに10回以上訪れているが、博多港から運行されている「フェリー太古」はこれまでに一度も利用したことがなかった。フェリーは博多港を23時45分に出発し、宇久島、小値賀島、中通島^{なかどおりじま}の青方^{あおかた}を経て、7時25分に奈留島に着く。つまり夜行便だ。福江島が最終到着地になり、2時間ほど停泊し、昼間、博多港に戻る。

今回の島旅で広義の五島列島のうち五島市及び新上五島町の有人島は全て踏査することになるので（まだ出かけていないのは佐世保市の寺島と数分上陸した野崎島の2島だけ）、今までに利用したことのないルートで訪れることにした。

フェリーは出発の2時間前から乗り込むことができるが、それでも21時45分まで時間をつぶさなければならない。ところが福岡県は「まん延防止等重点措置」が適用されているので20時には飲食店は閉まってしまう。しかし行政の指導を守らない店は必ずあるだろうと期待を込めて中州の盛り場を歩くと、予想通りけっこう人通りは多く、クラブのお姉さん方も歩いているしスナックもやっている店が多いようだ。長浜ラーメンの店に入ると24時までやっているとのことで、ここでは公然と酒類を提供していた。時間つぶしに生ビールを2杯飲んだ。

タクシーで博多港に向かい、フェリーに乗り込む。フェリー太古は1,598トンで、旅客定員は350人、普通車は55台まで積める。1階がスタンダード席、2階がスイートやグリーンなどのワンランク上の客室が配置されている。乗客は少ないものと判断し、スタンダード席をとる。スタンダードはカーペットが敷かれた座敷、ここで雑魚寝となる。枕があるだけで、毛布が必要な人は100円出して借りなければならない。予想通りコロナ禍で顧客は少なく、同じ座敷には3人しかおらず、それぞれ広い座敷の四隅に陣取った。

中通島の青方港に入るところには陽が昇り始めた。青方港の前に折島という小さな島があり、この島の前にメガフロート式の洋上石油備蓄タンクが置かれている。フェリーはこの前を通って青方港に入った。意外にもここから乗船して福江島に向かう乗客が多く、3人しか

いなかった座敷に4～5人が乗り込んできた。

青方を出港したフェリー太古は中通島と若松島の上に架けられた若松大橋の下を通過した。かつて若松島に渡った時に利用した橋である。フェリー太古は定刻通り、奈留島の奈留ターミナルに着岸した。

奈留島に来るのは3度目だ。ターミナル内に事務所が置かれている奈留島レンタカーで軽自動車を借りる。朝早くから開いている食堂はなかったの、朝食は食べなかった。



奈留島に停泊したフェリー太古（左）、若松大橋を通過するフェリー太古（右）

分散する集落

奈留島は面積が23.68 km²で、広義の五島列島の中では福江島、中通島、^{ひさかじま}久賀島、若松島、宇久島に次いで5番目に大きい。滝ヶ原瀬を挟んで若松島と、奈留瀬戸を挟んで久賀島と接している。海岸線は複雑に入り組んでいるから、総延長は75.4 kmに及ぶ。島の中央部には約3 kmの細長い^{なんごし}南越半島があり、その両側に相ノ浦湾と^{ふねまわり}船廻湾という2つの湾が深く切り込んでいる。

長い海岸線に沿って多数の集落がほぼ等間隔に点在している。行政区分上は22地区（属島の前島と葛島を除く）に分かれ、地区はさらに小さな単位の集落で構成される。このように集落が分散しているのは、江戸中期に五島藩の要請によって本土の外海地方からの移住者が、未開発な土地を開墾して住み着いたからだ。当時は船が唯一の交通手段だったから海の近くに家が建てられたものと思われる。したがって現在でも海から離れた山の中に集落はない。

外海地方からの移住者は潜伏キリシタンであった。潜伏キリシタンは外国人の宣教師が不在だったおよそ230年間に日本独自の土着型宗教へと変質し、いわゆるカクレキリシタンになる。明治維新後にキリスト教が解禁されると、多数の宣教師がヨーロッパから日本に入ってきた。潜伏キリシタンの一部は彼らの巻き返しにより改宗し、復活キリシタンが誕生した。一方、潜伏キリシタンの一部は自らが正統派であるとして、先祖伝来の変質したキリスト教を守り続けた。潜伏キリシタンは、解禁後に、①日本型に変質した土着宗教を守るカクレキリシタンと、②明治維新後に改宗した復活キリシタンに分かれたのである。復活キリシタンは教会を建設して信仰の拠点とした。つまり日本に存在する教会は全て明治以降につくられたものなのだ。

少々脱線するが、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が2018年7月に世界文化

遺産に登録されているが、当初は教会群そのものの登録をめざしていた。ところがヨーロッパには日本の神社仏閣のように古い歴史を有するはるかに古い教会が至る所にあり、たかだか明治以降につくられた日本の教会が世界遺産になりようがない。このためユネスコの諮問機関 ICOMOS（イコモス）は禁教期に焦点を当てるべきだとして、今回の指定は教会自体ではなく禁教期の集落や生活が世界遺産の対象となったのだった。ちなみに奈留島では後述する江上集落が構成資産になっている。

図1は1973年10月末時点での奈留島の23集落（この中には属島の前島を含む）の世帯数と人口、及び集落の特徴をカクレキリシタン、復活キリシタン、地下に分けたものである（野口英子・五島キリシタンの家分封を基に作成）。奈留島は五島列島の中では最もカクレキリシタンが多い島といわれており、前島を含めて16集落に及ぶ。彼らは既存の仏教宗派の寺院の檀徒（明治以降は神道を含む）であるとともにひそかに日本の風土の中で独自に発達、変質したキリスト教を守ってきた。一方、復活キリシタンの単独集落は江上と西江上の2集落にすぎず、カクレと復活の混住集落は5となっている。外海地方からの移住者は「居付」、彼らが移住する前から住んでいた集落は「地下」と呼ばれていたが、地下の集落は浦、泊、東風浦、船廻、夏井、大串の6集落に過ぎない。

表1 奈留島の集落の特徴と世帯数、人口（1973年10月末）

集落名	分類	世帯数	人口	集落名	分類	世帯数	人口
浦	地下	143	539	椿原	カクレ	23	113
浦向	カクレ	117	428	永這	カクレ	31	128
相ノ浦	カクレ復活混住	264	935	汐池	カクレ	41	169
檜木山	カクレ復活混住	121	556	船廻	地下	41	117
白這	カクレ	78	303	田岸	カクレ	73	260
外西海	カクレ	40	148	矢神	カクレ	61	228
内西海	カクレ復活混住	40	136	南越	カクレ	61	282
泊	地下	96	313	夏井	地下	106	419
大林	カクレ	56	250	江上	復活	28	87
前島	カクレ	36	129	大串	地下	101	398
奈木	カクレ	17	61	西江上	復活	20	80
東風泊	地下	37	149	総数		1,631	6,228

野口英子・五島キリシタンの家分封を基に作成

奈留島の人口が最も多かったのは1960年のことで、9,268人に達していた。その後、高度経済成長が始まると、若者を中心に都会へと流出し、人口は急速に減少する。また後述するように1990年代以降の中小型まき網漁業の衰退は人口減少を助長した。2015年国勢調査時の人口は2,246人、世帯数は1,226戸なので、ピーク時の1/4以下になってしまった。

奈留島は2014年に福江市と富江町、岐宿町、三井楽町、玉之野浦町、奈留町の1市5町が合併するまでは1島1町であった。この合併により、奈留島は五島市になった。島の中心部に五島市役所の奈留支所が置かれているが、この建物はもともと奈留町役場であった。役場を訪ね、住民基本台帳上の人口と世帯数、小中高校の在校生数のデータをもらった。

現在、奈留島の人口と世帯数は、島の中心部（浦地区）、南部（泊地区）、西部（大串地区）、

東部（船廻地区）の4つの行政区に分けて公表されており、集落別の統計は公表されていない。したがって表1の集落別人口との比較はできない。2021年6月1日現在の住民基本台帳上の人口は2,055人、世帯数は1,289戸であった。国勢調査時よりも人口は200人ほど減少している。地区別の人口と世帯数は次の通りであり、浦が圧倒的に多い。表1に示した1973年時点と比較すると、島の中心部である浦への一極集中が際立っている。なお、島民の中に6人の外国人がいる。

浦：1,302人（792戸）、泊：338人（203戸）、大串：148人（105戸）、船廻：267人（189戸）、

支所の近くには、漁協、商工会、郵便局、病院、開発総合センターなどの公共施設が集積し、商店や飲食店がメイン道路沿いに軒を連ねている。

島内の交通はバスとタクシーである。バスは丸濱産業(有)が運航する4系統のバス路線があり、船客ターミナルを起点に大串地区の雛ノ浦、船廻地区の矢神、東部の汐池、南越半島の水ノ浦を結んでいる。南越路線は1日2便であるが、その他の3路線は1日4便運行されている。ただ便数が少なく不便で、観光客はあまり利用していない。



城岳展望台から相ノ浦湾と船廻湾を望む（左）、泊地区に置かれている五島市役所の奈留支所（右）

クロマグロ養殖

午前中は相ノ浦湾の西側、つまり奈留島の西半分を回ることとし、相ノ浦湾の東海岸の道路を北上する。市街地を抜けるのに道を間違え一苦労したが、海岸沿いに出ると一本道となった。

夏井地区に入ると奈留町漁協夏井地区漁獲物荷捌き施設と書かれた建物が見えてきた。建物の前に魚類養殖用の餌を供給するため台が置かれ、ちょうど作業を終えたところだった。働いていたのは2人の青年で、島では珍しいから、話しかけるとベトナムから来たという。けっこう日本語がうまい。ベトナム人技能研修生は兩人とも21歳で、今年から来ている。来日に備えてベトナムで日本語を習ってきたのだろう。同事業所の従業員は10人ほどなので、そのうちの2人がベトナム人研修生ということになる。続いて事業所の責任者らしき人も見えたので簡単に話を聞く。

ここはマルハ系列の大洋エアンドエフ(株)がクロマグロの養殖を行っている事業拠点だった。同社は山口県（油谷湾）、高知県（柏島）、沖縄県（本部）、長崎県の福江島と奈留島でクロマグロ養殖を展開しており、4県5事業所のうちの一つである。当地に進出したのは

2013年からだ。

漁場はこの荷捌場からは1.5 kmほど離れた相ノ浦湾の湾口部にあり、直径50～60mの円形生簀が6基配置されている。毎年4,000尾ほどの幼魚を導入し、約3年かけて育て、60 kg前後で出荷するそうだ。

福江島の奥浦地区と柁島にニッスイ系の金子産業のマグロ養殖場があり、若松島には島内資本のマグロ養殖場が何社もあるので、五島列島は日本のクロマグロの一大養殖基地となっている。

ちなみに漁協のこの荷捌場は、水産物の水揚げも行うが、餌の保管庫になっているようで、近くにはすでに朝の給餌作業は終了した給餌用の漁船2隻が係留されていた。またモイストペレットの造粒機も置かれていたので、ここではモイストペレットも与えているのだろうか。マグロはラウンドの生餌しか食べないと認識していたが、最近はモイストも食べるように改良されたのかもしれない。

成長産業化の掛け声とともに民間資本を導入して魚類養殖を推進すべく漁業法が改定された（特定区画漁業権の優先順位を廃止）。奈留島における大手資本によるクロマグロ養殖の導入はまさにこの政策転換がめざす方向を先取りしたものといえるだろう。企業進出によって島に雇用を創出し、過疎化に歯止めがかかれば、地域政策としてこの政策転換は意味をもつ。しかし実態はわざわざベトナムの地から青年を連れてきて成り立っているわけだ。ベトナム人の青年たちは技能を覚え、金をもってやがて本国に帰るだろう。つまり島の過疎化はくい留められることなく、ますます空洞化が進むことになる。どうやらこの政策転換は地域政策とはなり得ないことを実証しているように思える。地域にとって唯一のメリットが区画漁業権の行使料収入とは情けない限りだ。



マグロの餌料を積み込む台（左）、ベトナム人の研修生（右）

江上天主堂

夏井地区から遠命寺トンネルを抜けると奈留瀬戸が正面に見え、対岸に久賀島が横たわる。この一帯が大串地区であり、最初の集落が江上だ。江上は外海地方から最初に4家族が移住して開拓された集落である。その後、世帯数と人口は増える。この集落の人々は潜伏キリシタンであったが、表1に示したように明治維新後、復活キリシタンになった。1906（明治39）年にカトリック信者によって江上教会が作られ、さらに1917（大正6）年に鉄川与助によって現在の教会に建て替えられている。

この教会の前に奈留町立小学校があった。1998年3月末で廃校となっており、閉校記念碑が校庭の隅にたっていた。校舎や付属する建物は全て撤去されて更地になっている。時々草刈りは行われているようで、広い敷地跡を確認できる。1875(明治8)年に夏井学校と大串学校が創立され、1908(明治41)年に両校が合併し、戦後には中学校が創立された。しかし中学校は先行して1965年に廃校になっている。遠命寺トンネルが開通したのは1994年2月なので夏井地区の小中学生は険しい山道を越えて通学していたことになる。

この江上集落は2018年に世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に登録された12の構成資産の一つであることはすでに述べた。構成資産たる根拠として、「江上集落は『潜伏』の終焉を可視的に示す(中略)。江上天主堂は禁教期の集落との連続性を高く示し、風土に溶け込むように立地する」と案内板に書いてあった。世界文化遺産は禁教令時代に潜伏キリシタンが形成した集落景観が対象であって、教会は明治以降の解禁後に建てられたものなので、当然対象外のはずである。構成遺産は潜伏時代の集落なのだが、こんな細かな事情は分からないから観光客の大半はこの江上天主堂が世界文化遺産と誤解してありがたく見物することになる。「潜伏キリシタンは幕府の厳しい弾圧に耐え、仏教を隠れ蓑にして命がけで信仰を守り通した」との美談が浸透しているが、じつは潜伏キリシタンは日本型土着宗教に変質しており、弾圧の対象は明治維新後に外国人宣教師に扇動されて改宗した復活キリシタンであり、禁教令が廃止されるまでのわずかな期間にすぎなかった。

肝心の集落は旧小学校の校庭を挟んだ反対側にあった。海岸沿いを含めれば5~6軒の家が残っているが、人は住んでいない。表1に示したように1973年当時は28世帯(87人)あったので、この半世紀の間にほとんどの家は朽ち果てて樹木の中に埋もれているのだろう。2003年には人口は12人に減少、その後無人化した。移住者である彼らは土地に固執しなかったのだろう。

旧小学校跡に近接した家は石垣が整然と積み、周辺はきれいに手入れが行き届いている。おそらく世界遺産に登録されたので、行政やボランティアによって管理されているものと思われる。外海地方も険しい山で石垣を造って家を建てていたから、奈留島に移住した人々も石垣を造るのはお手のものだったのだろう。五島列島に数多くある居付の集落は険しい地形のところが多いので、同じような石垣をこれまでも数多くみてきた。



1918年に建てられた江上天主堂(左)、江上集落の跡(右)

教会堂は昔のまま残されているが、地元には信者がいないので利用されることはないだろう。やがて朽ち果てる運命にあったのだが、2008年に国の重要文化財に指定され、こ

うして世界文化遺産の構成資産の関連施設として位置づけられていることから、行政が維持管理を図ることになる。

日本人は世界遺産が好きだ。登録されれば観光の足しになり観光客が多く訪れるようになって地域経済を潤すと思っている。しかし熱が冷めれば観光客は減っていく。同じく「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成要素となっている頭ヶ島^{かしらがしま}の集落、野崎島の集落跡、黒島の集落をこれまでに見てきたが、無人化して集落は崩壊あるいは超過疎化した集落に変わり果てている。解禁後に建てられた教会が残るだけになっており、世界遺産登録の根拠は随分怪しいものだと感じざるを得ない。

大串地区

江上から北上すると、大串湾に沿って大串と雛ノ浦という2つの集落が形成されている。湾に沿って家が点々と続く。福江市史によると、「奈留は大串から開ける」と言われたようだ。大昔、島の中心はこの大串だったという。中国大陸に渡航する船の寄港地として栄えたのだろう。江戸期にはかつての繁栄は影を潜め、ひなびた漁村になった。戦中、戦後は大串湾内にキビナゴが大量に来遊し、これを地曳網で獲ってイリコに加工して出荷していたらしい。こうした歴史的な経緯から明らかなようにこの地区は地下の集落であった。

1957年当時、両集落には574人が住んでいた。漁業で繁栄していた証だろう。しかし2003年には137人に減少、現在はさらに減り、空き家が目立つ。島外へ出かける玄関口である港は南部の泊にあり、大串は最も不便な位置にあることも影響しているのかもしれない。

大串地区の漁港には漁船は2隻のみ、雛ノ浦地区には漁船1隻と船外機が2隻置かれているだけなので、漁師はほとんどいないものと推定される。今や産業は存在せず、高齢者ばかりの集落となっており、人がいなくなるのも時間の問題のようだ。

湾奥は山が途切れていて、しかも北西を向いているため冬季には季節風が通り抜ける道になる。この通り道を塞げば風が弱まる。遠命寺トンネルを掘った時の残土で風が通り抜ける谷間を埋めれば、残土の処理と風の道を遮蔽する一石二鳥の効果が期待できる、との発想で谷間が埋められた。遠くから見ると、ダムの堤体のように見える。



大串集落の背後に造成された風よけダム（左）、大串湾湾奥に形成された大串集落（右）

大串と雛ノ浦の間に日枝神社^{ひえ}が置かれている。もともとは1885（明治18）年に建てられたものだが、1927年に建て替えられた。神社の前には高い石垣が組まれ、石づくりの立派な鳥居は1989年につくられた新しいものであった。大串集落の背後の斜面に100基ほどの

墓石がひな壇のように並んでいた。

雛ノ浦が行き止まりになった。大浦系統のバスの終点になる。

多賀真珠

再び来た道に戻り、遠命トンネルを抜けて夏井集落に入った。集落の突き当りを左折し、相ノ浦湾に沿って湾口に向かう山道を進む。クロマグロの養殖施設をみることができるかもしれないと思ったのだ。しかし道幅が狭く、しかも未舗装で危険なため、途中で引き返す。かつてこの先に人家があったようだが、今はない。

もとの道に戻り、相ノ浦の西岸を南下し、白這地区に着いた。ここに多賀真珠という真珠会社の養殖場があった。作業場の沖合に養殖用のボンデンブイが並んでいるが、その数はあまり多くない。小規模生産に徹しているようだ。ここで真珠養殖をしているのは清水多賀夫さんといい、真珠養殖のメッカ・三重県の英虞湾から 2003 年に奈留島にやってきた移住者である。

周知の通り、1996 年には真珠の母貝であるアコヤガイに赤変病が流行して以来、真珠業界では中国産の耐病性の強いアコヤガイとの交雑貝、いわゆるハーフ貝が母貝として使うようになった。しかしこのハーフ貝は大玉の真珠を作るには適していない。多賀真珠はこのハーフ貝は使わず、奈留の海域に生息する天然のアコヤガイを母貝としている。潮流の関係でこの海域のアコヤガイは赤変病に罹患するのを免れたようなのだ。天然の在来種を母貝に使用しているのは、私の知る限りでは福岡県の相島あいのしまとこの奈留島のみである。

作業場をのぞいたが誰もいなかった。漁協で聞いた話では、小規模な経営なので一人でやっているとのこと。おそらく清水さん本人はどこかにでかけていたのだろう。直接本人に取材できなかったことが悔やまれる。

通常、母貝養殖と真珠養殖は分業化されている。しかし多賀真珠では、産卵期になると湾内に採苗器を吊るして自家採苗し、母貝もつくっており、採苗から真珠づくりまで一貫生産する珍しい形態だ。天然の在来種は大きな核に対しても真珠層をまく力があるので、多賀真珠では直径 13~14 mm の大玉づくりで差別化を図っているという。インターネットで確認すると、猫や犬のペットの遺骨を特殊な方法で固めて、これを核にオーダーメイドの真珠を作るサービスも行っているようだ。依頼主はこの真珠を身に着けていることで、ペットといつまでも離れずにいられるという狙いなのだ。



多賀真珠の作業小屋（左）、作業場の前に置かれた真珠養殖施設（右）

小田河原の展望台と宿輪の集落

白這地区の背後の山にある小田河原の展望台に登ることにした。麓で畑にネットを張る作業をしていた人に道を尋ねる。ついでに何のためにネットを張っているのか聞いたところ、カラスによる食害を防ぐためだという。奈留島には後述するように、島の北東部にはイノシシが多く生息し、西部はカラスと、農作物への鳥獣被害に苦慮している。

展望台の下までは舗装道路が整備されていて車で楽に登れる。車を停めて少し歩くと木製の展望台が整備されていた。眼下に奈留瀬戸を望むことができ、ここから対岸の久賀島を写真に収めた。展望台の下あたりには以前、小田の集落があったらしいが、現在、人は住んでいない。

展望台から西側に下ると宿輪^{しほくわ}の集落があった。人家が5～6軒見られた。漁港には大きな漁船が4～5隻係留されていた。定置網の漁船かと思ひ、船に近づく。船の上で作業している人がいたので少し話を聞いた。

じつはこの船はまき網船団の漁船で、恵比寿丸という船団だった。この宿輪は中小型まき網の根拠地になっており、経営者はこの集落に住んでいる。後述するように、現在、奈留島の中小型まき網船団は2ヶ統に減少しているのだが、そのうちの1船団が恵比寿丸なのだ。

恵比寿丸船団は本船、灯船、運搬船の6隻で構成され、乗組員は30人ほどである。漁獲対象はアジ・サバがメインだが、最近はアジが少なくなっているという。漁獲量が多い時は長崎魚市場に出荷し、少ない時は奈留島漁協の荷捌き場に水揚げし、主として漁協の加工事業の原料になっている。

海岸沿いの道を走り、島の中心部に戻る。途中、人家のない場所に島内で発生したゴミを処理する清掃工場が建っていた。



小田河原の展望台（左）、宿輪の漁港に係留されていた恵比寿丸船団の漁船（右）

小中高校

西海岸から急な坂を登った高台に五島市立奈留小中学校と長崎県立奈留高校が置かれている。小中学校と高校は屋根付きの長い廊下でつながっていた。

奈留島では2001年度から連携型中高一貫教育が導入され、さらに2018年度から小学校が加わり連携型小中高一貫教育が実施されている。中高一貫教育は、①1つの学校として中高一貫教育を行うタイプ、②選抜試験を行わず同一の設置者による中学校と高校を接続するタイプ、③異なる設置者間で、中学校と高校が教育課程の編成や教員・生徒間の交流等の

連携を深める形で中高一貫教育を実施するタイプに分かれるが、奈留島の場合は③に相当する。

県立奈留高等学校は1965年に長崎県立五島高等学校奈留分校として開校した。1976年に奈留高校として独立する。分校時代には五島高校の校歌を歌っていたが、歌詞が奈留島との縁が薄く、なじみにくいものだったことから、当時の女子生徒がラジオの深夜番組で校歌と作ってくださいと投稿したところ、それに応えて荒井由美（松任谷由美）から「瞳を閉じて」という曲が贈られ、これが愛唱歌として歌い継がれてきたという。この歌碑が校舎の脇に置かれていた。

戦後、奈留島には奈留小学校の他に上述した江上小学校と船廻小学校の3校あったが、児童数の減少により3校が奈留小学校に統合されて現在に至る。2021年4月1日現在の小学校の児童数は36人、中学校の生徒数は12人、奈留高校の生徒数は35人である。それでも児童・生徒数が減り続けているため、学校の存続と島の活力維持を図ろうと、島外からの留学生を受け入れ始めている。今年度は高校生35人のうち22人（男12人、女10人）が離島留学生で、在校生の過半数に及んでいる。

離島留学生は現在、ホストファミリーと呼ばれる個人宅で生活しているが、4月からオープンした学生寮に留学生の一部が入っているという。奈留しまなび協議会がクラウドファンディングや島民・島出身者に呼びかけて資金を集め、古民家を改修し、9つの個室と共有スペースが整備した。



奈留小中学校の建物（左）、高校とつなぐ長い渡り廊下（右）

小中学校から坂を下って奈留ターミナルに出て、連絡船に乗って湾口に位置する前島に行った。

奈留町漁協

前島から戻ってすぐに奈留町漁協に向かう。4階建のビルの1階に購買店舗と水産物の直売所（マルナという名称）があり、2階が事務所になっている。同漁協を訪れるのは3回目になる。今回はクエの漁業（五島栽培漁業センターからの依頼）の調査で伺った。その時にもお世話になった出口浩一参事が対応してくれた。ちょうど漁協の事業決算で忙しくしており、聞き取りは手短に行った。

現在の奈留町漁協の正組合員は191人、准組合員は176人で、合わせて367人である。2002年3月末時点の正組合員数は463人だったので、この20年ほどの間に当時の4割ほど

の水準に減っている。

奈留島は山林が 85%ほどを占めて圧倒的に多く、平地は限定的である。かつてあった段々畑は姿を消し、農業はすでに成立しなくなっているから、島の唯一の産業が漁業である。2015 年国勢調査時の就業者総数は 905 人であったが、そのうちの 24%に相当する 218 人が漁業に従事していた。

同漁協の基幹漁業は県知事許可の中小型まき網漁業（19 トン未満）である。昭和末期には 16 船団あったが、マイワシ資源の減少の影響を受けて相次いで廃業を余儀なくされ、2014 年には 5 船団となり、2018 年には 4 船団、そして現在は 2 船団に減少している。ピーク時の 1989 年のまき網の生産額は 28.6 億円であり、まさに島の経済を支えていた。

1980 年代後半のマイワシ資源が豊富な時期は、マイワシの価格が kg あたり 10 円ほどに下落し、イワシの食用化を進めることで単価を向上させようと、「いわし食用化協会」（現一社いわし普及協会）なる組織が立ち上がり、魚価の向上が大きな課題になっていたが、今から見れば価格が安くとも獲る資源があれば漁業は維持できることを示している。マイワシはフィッシュミールや養殖魚の餌として大いに活用され、ミール業界や養殖業界を潤したのだった。奈留島やその周辺でも豊富で安い餌を背景としてハマチなどの魚類養殖業が発展したが、イワシ資源の減少と共に相次いで廃業していった。つまり獲る資源が大幅に減少したことが漁業にとって致命傷となった。

現在稼働しているのは上述した恵比寿丸船団と、樹漁丸船団の 2 経営体のみである。恵比寿丸の船団構成はすでに述べたが、樹漁丸船団は灯船 2 隻、灯船兼運搬船 1 隻、運搬船 1 隻、網船 1 隻の 5 隻で構成され、乗組員は 25 人程度である。2ヶ統のまき網の生産額は 6 億円ほどなので、ピーク時の 1/5 ほどに減少している。まき網は 1 船団で 25 人ほどを雇用するから島における雇用機会としても重要だし、定年後、地元で小漁師として沿岸漁業に従事することで沿岸漁業を支える担い手としても重要である。

中小型まき網以外には、釣り、定置網、刺網、タコツボ、延縄、素潜りによる採貝藻などの沿岸漁業が営まれているが、その生産額は 1.7 億円ほどだ。魚類養殖と上述した真珠養殖は企業経営なので、漁協とは直接関係がなく、区画漁業権の行使料収入が期待できる程度である。まき網以外の漁業について簡単に紹介しておこう。

釣りはイカ釣り、タチウオの曳縄釣り、一本釣りなどに大別され、30 経営体ほどが営む。イカ釣りの対象はケンサキイカが主体でミズイカも獲れる。ケンサキイカは子持ちの個体が少なくなっていて、資源が減少しているのではないかという。以前と異なり、イカ釣りは昼から夜に変わっている。沖で箱立てするようになり、鮮度がよくなった。また船の番号ごとにセリが実施されるようになり、品質が向上し、かつ安定してきたことから、このところ価格は上昇しているらしい。イカ類は長崎県漁連経由で関西圏に出荷されている。

定置網漁業は、大型定置網が 1 ヶ統、小型定置網が 4 ヶ統敷設されている。大型定置網はもともと漁協自営であったが、組合員に譲渡され、現在は個人が法人化して経営を継続している。この経営体は小型定置網を 1 ヶ統を併せて営んでいるので、定置網を営むのは 4 経営体ということになる。大型定置網の漁場は島の北部でクロマグロの養殖場の先にあたる。大型定置網の従業員は 5～6 人だ。

刺網は数経営体、タコツボは 4 経営体が営む。延縄ではクエを獲る漁師が 5～6 隻いる

(クエは延縄の他に一本釣でも獲っている)。採貝採藻は12~13経営体が営むが、魚類やガンガセなどによる食害が顕著で磯焼けがひどく、漁獲量は減少している。

魚類養殖は上述したように大洋A&F(株)がクロマグロを養殖しているが、この他に4経営体(在来の島民)がカンパチ、ヒラマサ、マダイとマアジを対象にそれぞれ養殖している。このうちマアジは長崎県内のまき網が獲った(地元のまき網は活魚対応をしていない)50~60gの小アジを300gほどの大きなサイズに育てて、佐世保魚市場を通じてアメリカに輸出している。佐世保魚市場は2015年から「花美鯨」のブランドで対米輸出を開始し、五島以外にも北松、平戸などの養殖業者の協力を得ているようだ。養殖したマアジは活魚で佐世保魚市場に出荷し、野メにしたものに保冷剤を入れ、チルドで輸出しているとのこと。放養尾数は4万尾ほどで、歩留まりがどのくらいかわからないという。



奈留町漁協の建物の全景(左)、1階の直売店舗のショーケース(右)

加工事業

奈留町漁協の水産加工場は奈留ターミナルの先にあり、漁港の水揚げ施設の道路一本隔てた背後に位置する。この一角には、製氷施設、冷凍施設、給油施設などが集約されている。水産加工場の責任者である京俊夫加工課長は、明日は不在というので、急いで加工場を訪ねた。加工場内を見学して、16時30分ごろまで話を聞いた。京課長は1997年からこの加工事業に関わるベテランである。

現在の加工場ができたのは1995年のことである。奈留町漁協における水産加工の歴史は古く、ここに加工場ができる以前は対岸にあり、当時は地曳網で獲れた脂の乗っていないカタクチイワシ、ウルメイワシ、小アジなどが原料に煮干しをつくっていた。今のように六次産業化と言われる以前から水産資源の有効活用の観点から取り組み始めたものである。カツオの燻製を作った時期もあるそうだ。その後、原料のカタクチイワシが減少したため、1995年からキビナゴ、アジの開き、アジ桜干し、カマス、イサキ、レンコダイなどの塩干品に生産をシフトして現在に至っている。製品アイテムは20種類ほどあるが、このうちアジとキビナゴがメインである。

加工事業は京課長を含めて8人の体制である。操業は月曜日から金曜日までが8時から17時まで、土曜日は半ドンである。後述するように今年からIターンの若手・水野孝史さん(33歳)が加わり貴重な戦力になっているが、最近^{たかふみ}は島内で女性のパートタイマーを確保するのは難しくなっているという。

現在の加工作業の流れを紹介しておこう。まき網などから荷捌き場に水揚げされた漁獲物はワンスルーで加工場内に運び込まれる。加工場に搬入されると直ちに開きなどに処理し、内臓などを取り除く。塩水漬けにして、しばらくしてから冷風乾燥機で乾燥する。その日の夕方には乾燥した製品ができあがるので真空パックし、冷凍庫に収納する。注文に応じて順次出荷する。

販売先は生協が中心で全体の約3割を占める。取引先の生協は首都圏のコープネット事業連合（現コープデリ生協連合会）、コープ近畿、コープ九州など全国にわたる。首都圏の生協の主力商品はキビナゴらしい。コープ九州は盆暮れのギフトが多いという。生協以外では、五島地区の土産物店や長崎県漁連、長崎漁港水産加工団地協同組合などに卸している。また漁協の直売所およびネット通販でも直接販売している。

加工原料は産地市場から4～5社の買受業者と競って入札により調達する。まき網の漁獲量が多い時は長崎魚市場に出荷するが（奈留島から長崎漁港まで運搬船で約5時間）、量が少ない時や相場が安い時は奈留島に水揚げする。以前は上五島のまき網漁船も奈留島に水揚げしたが、今は来なくなったそうだ。加工事業だけ考えればできるだけ安く原料を仕入れるという考えになるが、組合員の生活を守るために産地価格を下支えすることが漁協の使命でもあるから、両者が折り合うような適正な価格で仕入れているようだ。

漁協自営の加工事業の販売額は、多い時には1.3億円ほどに伸びたこともあるが、最近では7,000～8,000万円と低迷している。

これまで生産してきた水産加工品は塩干品が中心だった。塩干品は冷蔵が前提であり、常温で持ち運ぶことは厳冬期を除いて不可能である。常温で流通可能な商品であれば需要を拡大できる。加えて塩干品はご飯と相性がいい商品なので、米の消費減少に伴って需要は縮小さみである。今日の食の多様化に伴う新たなニーズに対応した新商品開発が漁協の加工事業を維持、発展させる上で重要な課題になっていた。

奈留町漁協では2017年度から「まちづくりアドバイザー事業」を活用して新たな商品開発に乗り出した。高知県でイタリアンレストランやドレッシングの製造を手掛ける(株)グラツェミーレの代表・森澤錠二シェフを招聘し、共同開発に着手する。森澤シェフはケンサキイカ（地方名：ヤリイカ）の現物をみて奈留島にいたく惚れ込んだようだが、島で獲れる素材を吟味し、最終的にできあがったのが次の7品目のレトルト食品である。近年、人気が高まっているイタリア風で、「漁師のイタリアン」と銘うっている。アジのフレック、ヤリイカのペペロンチーノ、サバのうま煮、タイ味噌、タイのアクアパッツァ、サバのトマトカレー、タコバジル

タコのバジルやヤリイカのペペロンチーノは袋から取り出してスパゲティなどに混ぜれば手軽にパスタ料理が楽しめる。タイのアクアパッツァはそのまま食べられるし、サバのトマトカレーはご飯にかければカレーライスになる。調理の手間が省けるから忙しい現在人向けだし、若い女性を中心の顧客獲得の期待も高まる。

今まで加工場にはレトルト食品を製造するのに必要な機械類がなかったので、加工場を間仕切りし、新たに4,000万円を投じて、スチームコンベクションオーブン、レトルト殺菌機、回転釜、定量充填機、ブラスト&ショックフリーザーなどを整備している。2/3は補助金だが、1/3を漁協の自己資金でまかなっている（内閣府の地方創生事業を活用し、2019年

と2020年の2年間にわたって整備。国と市がそれぞれ1/3を負担)。

加工場内に専用のレトルト処理室を整備し、機械類も揃えた。また新規事業を担う人材も確保した。2020年12月に職員を募集、コロナ禍なのでリモートで面接し、広島県で公務員をしていた水野さんを採用した。彼は離島での生活に興味を持ち、島で暮らしてみたいと思っていたそうだ。半年前の2021年1月に着任しているが、取材時点ではレトルト製品の生産に着手していなかったため、アジの水揚げ時期に当たって作業が忙しい塩干品づくりを手伝っていた。新商品はとりあえず既存の販売ルートを活用するという。

「漁師のイタリアン」の新商品は今年の10月から販売を予定している。



冷風乾燥機から取り出されたアジの開き(左)、イタリアンの新商品を担当する水野さん(右)

南越半島

奈留町漁協の加工場取材してから漁協本所の脇にある五島市商工会奈留支所を訪ね、同支所が発行した「まんかななる」という小冊子をもらう。続いて奈留漁港を南下する。途中、有漁丸、満漁丸、美代丸と書かれたまき網船団の漁船が係留されていた。廃業した後、処分されずにそのまま残っているようだ。その先にたいそう立派な奈留神社が鎮座していた。最南端の行き止まりまで行き、前島の全景写真を撮った。Uターンし、奈留の中心地を抜け、相ノ浦湾の東海岸を北上する。

相の浦湾と船廻湾に挟まれた約3kmの細長い半島は南越半島と呼ばれる。半島の付け根が田岸の集落で、半島の先に向けて松山、大小田、阿古木、水ノ浦と小さな各集落が続く。阿古木にはその名の通り、大きなアコウの木があった。ここに人が住み始めたのは江戸時代中期と言われおり、外海地方から移住したカクレキリシタンの集落であった。各集落を抜け、最も北に位置する水ノ浦まで走った。

水ノ浦から同じ道に戻り、半島の付け根を船廻湾側に出ると、喜久丸と書かれた比較的大きな船が係留されていた。南越には一時期3ヶ統のまき網船団があったが、次々と廃業してしまい最近まで活動を続けていたのがこの喜久丸水産であった。南越半島に平地はほとんどないので目の前の海から収入を得なければならないが、頼みの綱のまき網が相次いで廃業し、収入の道を絶たれている。集落の若い働き盛りは島を後にして外で収入を得るしかなくなり、過疎化が一層強まっている。このまま漁業の復興が図られなければ、やがてこの地域は廃村になってしまうだろう。



阿古木集落のアコウの木（左）、喜久丸水産のまき網船団（右）

船廻湾と葛島

船廻の集落は北向きに開けた船廻湾の奥に形成されている。湾奥に土砂が堆積し、その砂洲上に築かれた集落である。船廻の地名は南風の影響で浦に入港できない時にこちらに船を廻したことからつけられたといわれている。集落には船廻八幡神社があり、その周りに社叢が形成されている。いわゆる鎮守も森だ。この社叢はタブノキ、ナタオレノキ、ホルトノキなどが優占種となり、島では珍しい植生であり、1956年に県の天然記念物に指定された。

この隣に2007年3月に閉校になった旧船廻小学校があり、2008年7月から島出身の画家・笠松^{ひろとも}宏有の記念館となっている。笠松はすでに故人だ。彼の作品が展示されているが、すでに閉館時間を過ぎていたため見ることはできなかった。この奥に砂洲で封鎖された田を含む湿地があり、米も作られていたが、現在、埋め立てられて宮の森総合公園と特養老人ホーム「なるの里」が整備されている。総合公園にはバンガローなどの宿泊施設もあるようだ。また湾奥の海岸は海水浴場になっている。

船廻から湾の東岸を進んだ先端の集落が矢神である。手前に漁港が整備され、その北側の谷戸に集落が形成されている。奈留島の中では比較的大きな集落で40～50軒ほどの家が見られたが、大半が空き家のようなのだ。1957年当時の人口は298人、2003年には101人に減っていたが、現在の状況はわからない。漁港には10隻ほどの漁船が係留されていた。集落の北側には門構えのある墓地が斜面に雛段のように並んでいる。集落の前には矢神ノ小島という島があって、砂洲でつながっているようだ。

矢神の北には市幾良という集落があり、戦後まもなく10戸ばかりの家があったようだが、現在は無人化している。さらにその先にも南河原という集落があったといわれる。八神集落の沖合に葛島が横たわっていた。

葛島は江戸時代中期に大村藩三重村檜山郷からの3家族の移住者によって開拓された島である。彼らはいわゆる潜伏キリシタンであったが、明治維新後、復活キリシタンとなった。明治初期には12戸に増え、1899（明治32）年には島に教会堂も建てられている。この当時の人口は263人に膨れ上がっていた。そして1957年には船廻小学校の分教場も設置された。しかし高度経済成長期を経て若い人を中心に島を離れる人が多くなり、島の人口は急速に減少した。1973年3月に23戸120人が檜木山地区に整備された住宅に集団移転し、約250年の歴史に終止符を打っている。

すでに18時近くになっていた。ここからもと来た道に戻り、宮の森総合公園の脇を通過して山間部の道を抜け、市街地にある奥居旅館に入る。



矢神の集落（左）、矢神の集落から葛島を望む（右）

奥居旅館

奈留島には6軒（旅館2軒、民宿3軒、ゲストハウス1軒）の宿泊施設がある。ゲストハウスは上述した宮の森総合公園の中にある。離島統計によると旅館と民宿の収容能力は98人となっている。2015年に奈留島を訪れた観光客は9.1千人、宿泊客数は4.4千人であった。上述したとおり2018年には世界文化遺産に登録されて観光客が増えたと思われるが、団体客などの爆発的な増加がない限り島の受け皿は十分である。その後2020年に入って新型コロナウイルスが流行っていることから観光客は減っている。

5軒の旅館・民宿のうち最も古いのが奥居旅館だ。奥居旅館は島の中心地である浦にあり、漁協と奈留ターミナルのほぼ中間あたりに位置する。海岸道路を隔てて奈留漁港（第3種）に面している。

この旅館には前回来た時にも泊まっている。この時は漁協の組合長の招きで、懇親会をもった。その時の料理がひどく印象に残っていたので再び予約したわけだ。建物は木造二階建て、部屋数は別邸を含めて12室あり、コロナ禍ではあったが半分以上は埋まっていた。顧客は仕事の人で、観光客はいなかった。私の部屋は窓から海が見えるベッドのある部屋だった。おそらく前もこの部屋に泊まったような気がする。



奥居旅館の外観（左）、同旅館の朝食（右）

風呂に入って夕食を食べる。食事の場所は別室の座敷だった。この日の刺身はカンパチ、

ケンサキイカ、サザエ、カツオの4種。牛肉の焼き物、イカ焼き、五島うどん、ホタルイカ塩辛、高菜漬け、とろろであった。写真を撮るのを忘れたので正確でない。翌朝の朝食は、ハム、サバ焼き、きんぴら、生卵、布林、オレンジであった。海苔はひどい代物だったので手をつけなかった。

令和3年6月23日

南部地区

奥居旅館を7時30分に出発し、島南部の半島域を回ることにする。浦の次の集落が泊である。奈留ターミナルを経て漁協の荷捌場を見る。あいにく水揚げは行われていなかった。

そこから南下した最初の集落が大林である。谷あいには3～4軒の人家が並んでいた。海峡を挟んで目の前には昨日訪れた前島が横たわる。次の集落がロノ夏井だ。小さな湾は埋め立てによって広い漁港用地が整備されているが、係留されている漁船は2隻だけで、そのうちの1隻はだいぶ老朽化しており、使われているかどうかも疑わしい。道路脇にカネモ水産と書かれた冷蔵庫があったが、こちらも老朽化しており、すでに使われていないようだ。人家は漁港背後の道路に沿って点在するが、空き家が多いように見受けられる。港でおばあさんを1人見かけたが、他に人はおらず、猫が目立つ。半島の最も南の集落が浜泊で、ここで道は行き止まりになった。山際に人家が点在するが、人が住んでいると思われる家は数軒でやはり空き家が多く寂れている。まさに過疎地域である。この南部の集落は前島と同様、居付の集落で、カクレキリシタンであった。

半島を横断して東海岸に出る道が地図上で確認できたが、峠越えの細い道である。不慣れた険しい道の通行には少々不安があったため、来た道に戻り、奈留ターミナル脇の半島部の付け根部分にあたる最も狭い場所を横断する。東側に出たところが東風泊湾になる。道路を右折して海岸沿いの道路を南に進む。途中、道路工事の場所があった。湾に沿って真っすぐ進むと奈木の集落が現れた。この集落は泊地区からの分家が多いようだ。

集落の手前には口の字に囲われた比較的大きな漁港が整備されているが、漁船は見られない。かつて奈木集落には定置網やまき網船団があり、漁業で大いに賑わったが、定置網は売却、まき網船団は廃業し、広い漁港だけが残された。奈木の集落は20軒ほどで構成され、2003年の時点では67人が住んでいたが、現在の人口はわからない。人家は海岸線に沿って並んでおり、海岸に面した家では高い石積みの塀が築かれていた。



頑丈な石垣で囲われた奈木の人家（左）、舅ヶ浦の千畳敷と小島（右）

集落背後の小高い丘を越えた先に^{しゅうとがしま}舅ヶ島海水浴場がある。弓なりの美しい海岸が続く。海岸は玉砂利で構成されている。ただプラスチックごみが目についた。海水浴場の南側に小さな島があり、本島との間は千畳敷と称する平らで大きな岩で結ばれている。千畳ほどもある広い平地があるので、この名前がついたようだ。

舅ヶ島から背後の険しい山道を登り、椀島がよく見える位置で写真を撮影した。この道をまっすぐに進めば、半島の西側の口ノ夏井に出るが、Uターンして再び来た道に戻り、東風泊湾に沿って東風泊の集落へ向かう。

東風泊

弧を描くように長く伸びた東風泊湾に沿って防波堤が築かれ、その内側に道路が整備されている。奈木から東風泊の間には人家はない。まっすぐに東風泊に向かう。湾の北側の奥まった位置に東風泊の集落が形成されている。東風を避けて停泊できる港だったことからその名が付いた。

集落近くの海岸には大量のゴミ類が漂着している。おそらく集落の人口が減少し、清掃活動をすることができないのだろう。ゴミ類の中でもプラスチックゴミが目立ち、やがてマイクロプラスチックとなって海洋に拡散していくに違いない。

東風泊漁港（1種）の背後に集落が形成されている。平地はほとんどないため、人家は海岸線に沿った山裾に並ぶ。数にして30戸ほどあるだろうか。現在の人口はわからないが、1957年時点では244人、2003年時点では101人が住んでいた。東風泊は地下の集落であった。

漁港は南側に長い防波堤が整備されているので、南からの波浪は避けられ、静穏度は十分確保されている。防波堤の外側には魚類養殖の生簀が4列並んでいた。港で網繕いをしていた人の話では、東風泊では2経営体が魚類養殖を営み、カンパチとヒラマサを中心に養殖しているという。漁港内には給餌用の船と新勝丸と書かれた比較的大きな漁船が3隻係留されていたが、その他の漁船は少なかった。



たくさんのゴミが漂着する東風泊の海岸（左）、東風泊の集落と漁港（右）

城山展望台

東風泊から^{ながはえ}永道へ抜ける途中から城岳の展望台に登る道路が整備されている。頂上近くまで車で行くことができるので少ない時間を見計らって登ることにした。

道の両側にはイノシシの侵入を防止するための鉄製のメッシュが設置されている。この防護柵が延々と頂上付近まで続いていた。いろんな場所でイノシシの防護柵を見てきているが、これほど長い柵は初めて見た。恐らく市が公費で整備したものだろう。柵の内と外を出入りする必要があるので、その場所がわからないとまずい。このため出入口には「扉」と書かれており、この出入口が一定間隔で設けられていた。

坂道を登る途中で2人の高齢者が柵の周りの草を刈っていた。彼らはシルバーボランティアのようで柵の管理を請け負っているようなのだが、延々と続く柵の周囲の草刈りは大変な作業である。

やがて頂上付近の駐車場に着いた。脇にトイレが整備されていた。この広場から草の繁った坂道を登った先に展望台がつくられている。その脇には電波塔が立っていた。城岳の標高は189.1mである。島の最高峰は北東部の^{ひよどりこし}鶴越の276mであるから、ここよりも100m弱低いことになる。

この山は中世期にこの土地の豪族であった奈留氏が山頂に山城を構えたことから城岳の名がついたといわれている。奈留氏は、平時は山麓に集落を構えて居住し、戦闘時に山城に籠って戦った。麓の集落を根小屋^{ねこや}といったので、このタイプの城は根小屋式山城と呼ばれている。山城の跡を示す石垣がこの付近に残されている。奈留氏は遣明使の警護を務め、朝鮮貿易にもかかわっていたといわれている。

展望台からは周囲の島々を眺望できた。久賀島、椀島、前島などを撮影、奈留島の相の浦湾と船廻湾も山の間をわずかに確認できる。



城岳山頂に設置された展望台と電波塔（左）、イノシシ進入防止のための鉄柵（右）

永這と汐池

城岳展望台から下山し、再び奈留島の東海岸沿いの道进行。峠の下あたりに椿原の集落があるはずだが、道路からは確認できなかった。つづら折りの坂道を下ると永這の集落に出た。谷戸沿いと海岸沿いに分かれて人家が並ぶ。比較的大きな漁港が整備されているが、船外機が4隻係留されているだけだった。

次の集落が汐池である。砂洲で封鎖された背後に池が形成され、集落は主としてこの砂洲上に立つ。この砂洲の前面に汐池漁港が整備されている。この汐池と永這地区に人が住むようになったのは江戸中期と言われており、カクレキリシタンの人々であった。漁港内には漁船が数隻係留されているだけで、こちらも漁業はあまり盛んでないようだ。というよりも高

齢者ばかりで働いている人はいないのだろう。

汐池はその名の通り、海水が侵入する池であった。漁港の脇に細い水路があり、ここから海水が出入りし、汽水域となっている。ちょうど下げ潮時にあたっていたのですごく早い流れが海に向かっていった。ここからさらに北東約2kmのところには袋部という集落があり、半世紀ほど前まで5～6戸が住み、半農半漁の生活を営んでいたが、現在は廃村になっている。山道は残っているようだが、観光地図には「イノシシの巣窟 山道を歩く際はご注意ください！」と書かれていたので、行くのはやめた。永這は奈留島最大のカクレキリシタンの組織である元帳が戦後も残っていたが1971年に解散している。解散時には2つの元帳があり、汐池と袋部の数軒をあわせて47軒の帳下すなわちメンバーがいた。

山の中の道を走り、浦の市街地に戻った。奈留島には図書館はなく、奈留島総合開発センターの中に図書室があるだけだ。センター1階の図書室で郷土資料を閲覧する。センターではコピーのサービスを行っていない。近くに「福島」という文具店にコピー機が置いてあるというので、「福江市史」を借りて、コピーをお願いした。コピー代は1枚40円と一昔前の値段だった。島では需要が少なく、しかも民間なので致し方ないだろう。

奈留ターミナルに行き、レンタカーを返却する。ガソリン代はレンタカー費用に含まれているので給油の必要はなかった。



永這の集落と漁港（左）、海水が混ざる汐池（右）

奈留島を発着する船は、博多から利用した野母商船株のフェリー太古の他に、五島旅客船株と九州商船株の2社が運航している。五島旅客船株は高速船ニュー大洋とフェリーオーシャンが奈留島と福江島の間をそれぞれ1日3便、若松島との間を高速船が1便、フェリーが2便往復している。九州商船株は長崎～福江～奈留～奈良尾の間をフェリーで1日1便運航している。

五島旅客船株が運航する11時30分発の「フェリーオーシャン」に乗り、福江島に向かった。料金は高速船もフェリーも一緒である。

【文献】

- 福江市史編集委員会（1995）：第3章郷土の歩み、第4章行政・財政・住民、第7章産業・経済、福江市史。福江市。
野口英子（1975）：五島キリシタンの家族分封、奈留島・檜木山の場合。筑紫女学園短大紀要，10，47-63。
宮崎賢太郎（2015）：カクレキリシタン オラショ魂の通奏低音。長崎新聞新書004。長崎新聞社。pp295。
宮崎賢太郎（2018）：潜伏キリシタンは何を信じていたのか。KADOKAWA。東京。pp293。